

さっきイッたばかりなのに、また絶頂がすぐそこまで迫っていた。七海は菌を食いしばって男たちの暴虐に身体を揺さぶった。

「くっ！」

男が小さくうめいた。とたんに股間に熱い液体がまぶされかかった。それが、精液であることを七海は知っていた。

「こっちもだ！」

手でしごかせていた男も、遠慮なしに手のひらに精液をぶちまけた。どちらも、しばらく放精をしていなかったのだろう。白濁というより黄色い精液が七海の手と股間を汚していた。

七海の股間が無惨な有り様になっていた。昨日まで、誰の指にも触れられていなかった、真正正銘の処女の粘膜が、今や自らの愛液と男の白濁に淫猥いんわいにぬら光っていた。薬に犯されたクリトリスは、劇症性の快楽こそ失せたものの、敏感に仕立てられて、男たちの責め苦の前に包皮を脱ぎ捨てて勃起したままだった。

「さあて、じゃあオレはコッチだ」

もう一人の男がそう言うと、七海をひざまずかせ、目の前にペニスを突きだした。

「ぐっ！」

鼻を突く異臭に七海が眉をひそめた。しかし、男はまったくかまわずにそれで七海の唇を弾いてくる。

「んんっ！」

口を固くつぐんで抵抗を示す。が、別の男が七海の鼻をつまんで息をとめると、しばらくして唇がほころんだ。

「おおおっ！」

亀頭がねじこまれた。と、同時にクリトリスが指にしごかれる。あごに力が入らない。結果、七海は男の性器をなすすべもなく受け入れる結果になった。

「このぎこちなさが、そそるな」

髪をむんずとつかんだ男は、七海の頭を強制的に前後させ、ペニスをピストンさせていく。腕はいつの間にか、後ろ手に組まれた。公衆の前だというのに、まさに、されるがままだった。

（こんな、くああ、こんなっ……）

考えられなかった。名前も素性さえ知らない、見知らぬ男の汚い性器を口で頬ばらざるをえない。そんなことが人生に起こりうるとはとうてい信じられなかった。

「ほうら、いくぞ」

男は劣情を顔に浮かべてペニスを引きずりだすと、七海の顔めがけて精を打ち放った。おびただしい白濁が七海の顔にまぶされていく。咳きこみながら液を滴^{した}らせる七海。しかし、そんな彼女をさらなる淫虐が襲った。

男たちとは別の人物。事態を見守っていた乗客の一人、四十代くらいの無精ひげに顔を包んだ男が、どさくさにまぎれてペニスを引きずりだし、七海の前でしごいていた。

「やつ！」

逃げようとしたが、男は七海の頭をつかんで、顔をそむけられないように固定させ、さらには、身体を吊りあげて乳房を捧げさせた。

「あぐっ！ うぐうっ！」

亀頭がやわらかな胸に押しつけられ、乳首を弾きまわす。そして、男のペニスは跳ねまわり、白濁を放出する。

それだけではない。さつき精を放ったばかりの男が、またペニスを硬くしてしごきあげ、ポニーテールの髪に精を打ち放った。

男の精液に染まった七海の目の端に涙が浮かんた。こんな非道に自分がねじ伏せられることがあまりに屈辱だった。

